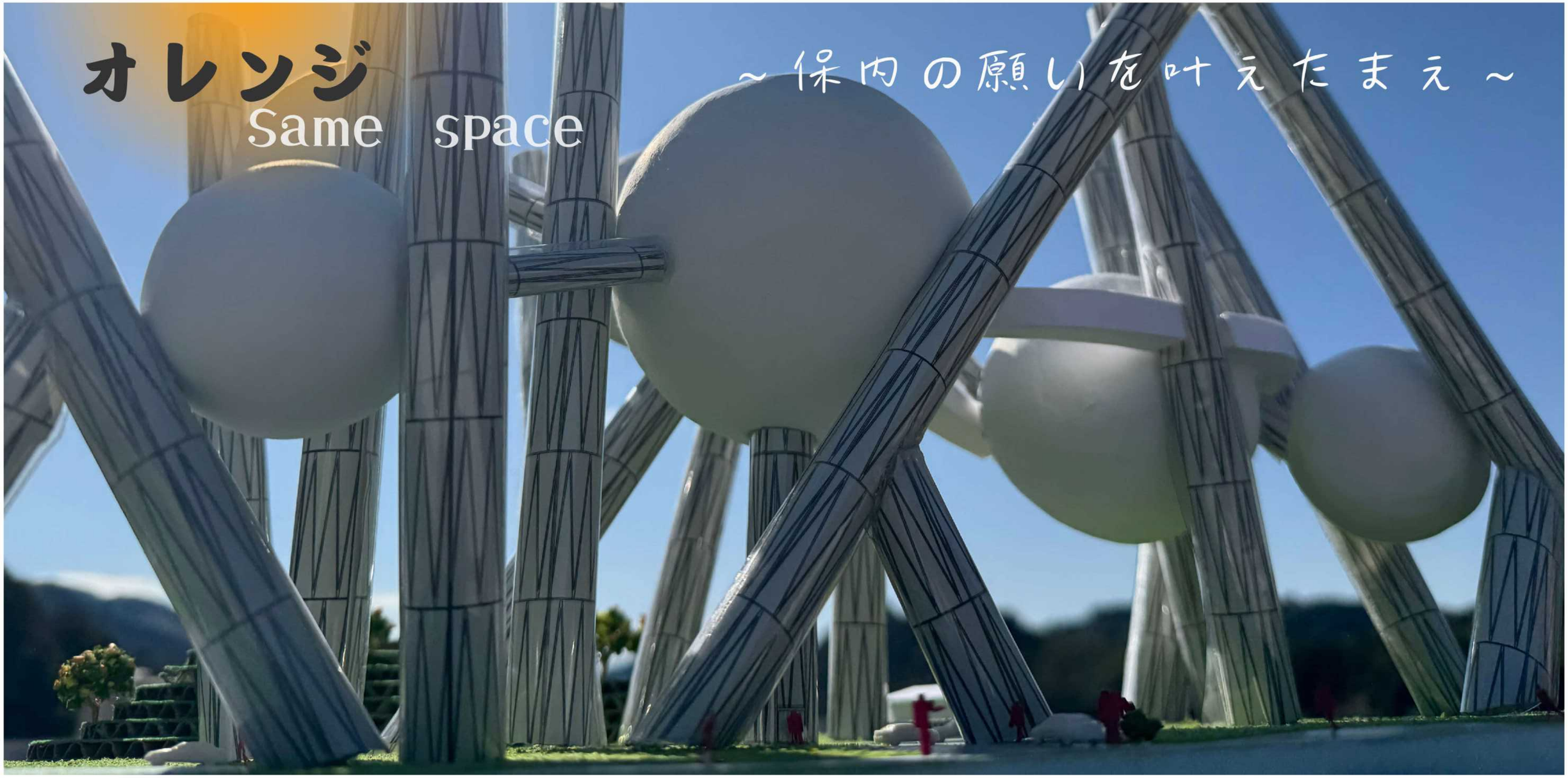
オレンジ
Same space

～保内の願いを叶えたまえ～



仕事・育児・介護一括化

少子高齢化の原因に『仕事・育児・介護』を並行することが困難なことがある。私は、これらを**一括化すること**が重要だと考えた。そこで、愛媛県八幡浜市保内町に新たに建物を呼び出す。
いでよ【オレンジSame space】

保内に活気を呼び戻せ

現在、**少子高齢化が進行**し、街に活気がなくなってきている。そこで、この建築で保内町に活気を戻そうと考えた。私の建築で**保内に人を呼び込み、人を増やし保内に活気を呼び戻す**。それが保内の願いでもあり、私の願いだ。

建設予定地

八幡浜市保内町

若者の減少

年々、小学生・中学生・高校生徒も減り現在八幡浜市にある３つの**高等学校が令和8年には、１つの高校に合併する。**

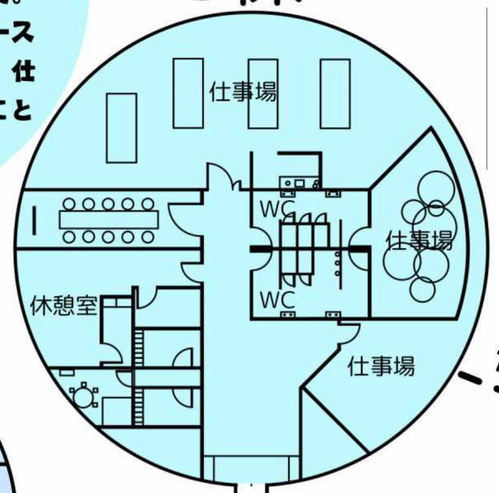
松山・大洲・九州の中間点

ここ保内町は長浜経由で松山に行く道と高速道路ができ、大洲からくる道、それに、三崎港からフェリーで九州から来た人が愛媛に入るときに通る道でもあり、**県内、県外の人が多く通る**場所である。

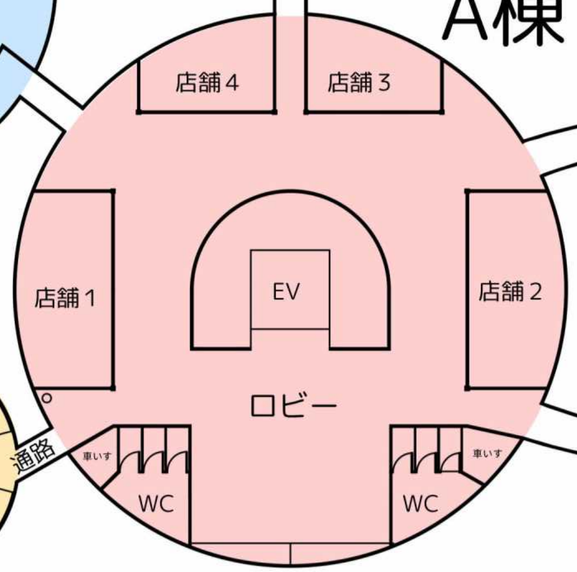
各フロアの説明

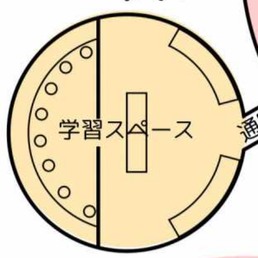
この空間は、仕事場である。ここでは、一般的な仕事場の部屋に育児スペースを付け加えて授乳時に使えるスペースを設け、仕事場での育児を可能とした。その他に、介護・育児スペース側の壁をガラス張りにして、仕事場から広場の様子を見ることができるようにした。

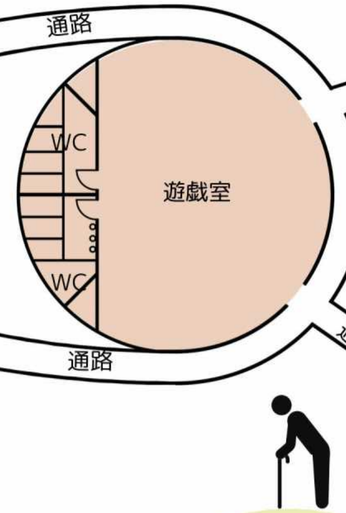
この空間は、現在核家族化で世帯間のコミュニケーションがない中で、育児・介護を一括したからこそできる、コミュニケーションの場を設けた。

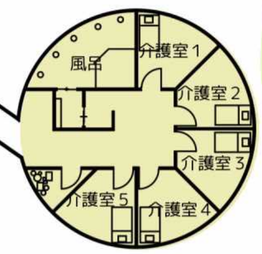


仕事場から子供が見える









この空間は、『育児・介護』の育児のスペースで、部屋１のB棟側の壁をガラスにすることで仕事場から見えるようにした。

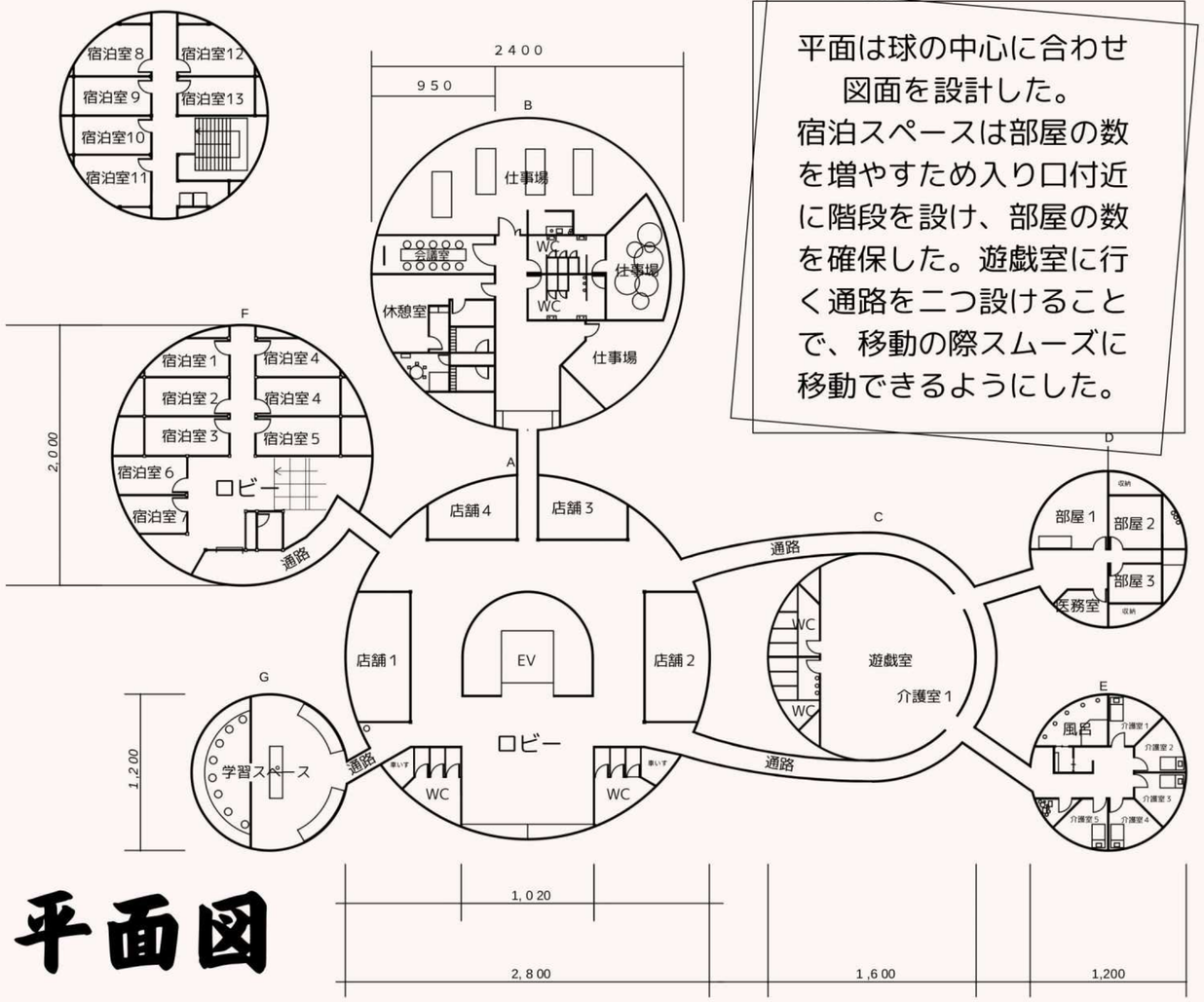
このスペースは宿泊施設になっている。この宿泊スペースを設けた理由は将来の四国新幹線開通を想定し【松山ー大分】の中間地点として保内に駅ができ、保内に訪れる人が増えることを考え設けた。

ここは、主に学習スペースとなっている。近くに小学校もあり、自由に使用することができるスペースになってい。

この空間は道の駅のような機能を持つ場所になっている。店舗には、保内の特産品、柑橘類の販売、川之石高校のマーマレードを使った店舗、水産練り製品（じゃこ天、ちくわ、蒲鉾）ちりめん、などを売る店舗を開く。そして気軽により多くの人が訪れ、保内を知ってもらえると考えた。

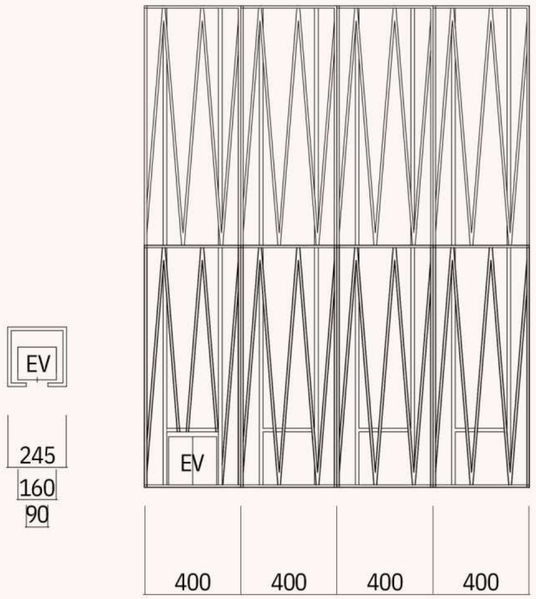
この空間は、『育児・介護』の介護のスペースで、個室を５つ配置している。

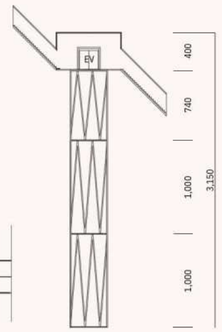
平面図



平面は球の中心に合わせ図面を設計した。宿泊スペースは部屋の数を増やすため入り口付近に階段を設け、部屋の数を確保した。遊戯室に行く通路を二つ設けることで、移動の際スムーズに移動できるようにした。

柱内エレベーター





真ん中の柱にはエレベーターを通してそこを出入り口にした。仕事場と遊戯室を繋ぐ動線の柱の中にもエレベーターを設け駐車場・育児・介護施設・仕事場の移動をスムーズにした。

柱は、ガラス張りにして柱とスラブの取り合いなど、部材が見える構造にして球体を浮いているように見せた。球体を支えている柱は三角形を組み合わせたトラス構造にして、荷重に耐えられるようにした。

八幡浜市の人口推移

実績とこれからの予想を見ても少子高齢化は進み、全体の人口も減り続けている。

保内町の人口

年数	世帯数	総数
平成１７年	4325	10775
平成２７年	4428	9925
令和５年	4328	8972

30年で人口が1803人も減少

保内町には

柑橘類の生産が盛んであり主に温州ミカンと伊予柑が中心である。

食料品製造業も盛んで、かまぼこや、じゃこ天、ちくわなどが有名。

保内は歴史もある町である。愛媛で最初の銀行第二十九国立銀行が川之石に設立、明治期に愛媛県内で一番早く電気がともる、金融機関（今日の銀行）が一番早くできるなど、隣の八幡浜市と共に、文明開化期をリードするなどの歴史がある。建物でいうと迎賓館やドレスメーカーの学校として使われた重厚な擬洋館で有名な上の写真の旧白石和太郎邸洋館などがある。

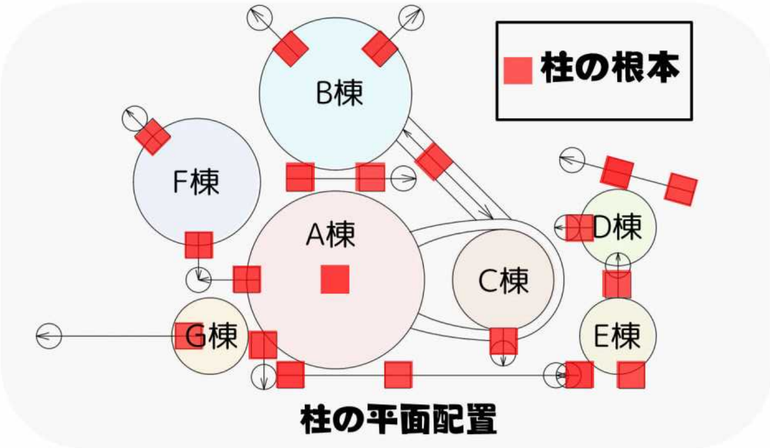
外観・部材のこだわり

建設予定地の宮内地区には財産区林がありその木材を使った設計を行った。

外観の特徴は、保内中学校横のもっきんロードにあるこのモニュメントからヒントを得て外観デザインに取り入れた。このモニュメントにみかんに見立てた球体を浮かせたように見せる設計をした。

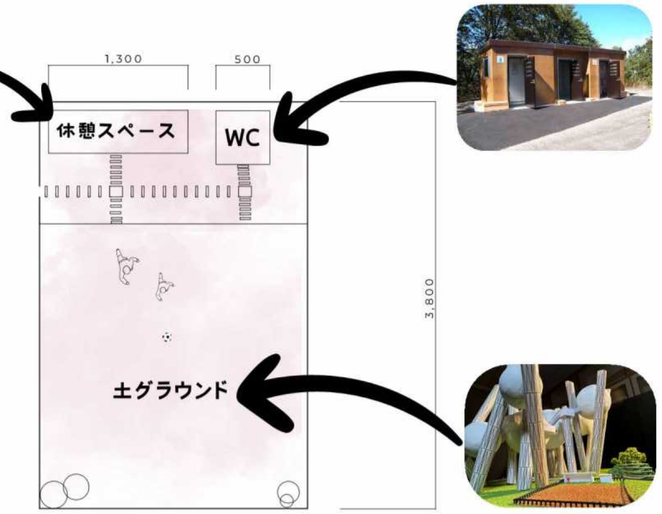
球体内イメージ写真

内装は広々と落ち着いた雰囲気で、木を多く使った。高さもあるため景色も楽しめ、よく日が入る設計にしている。



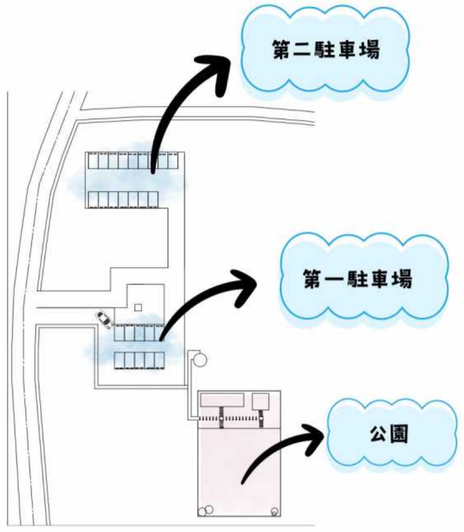
柱の平面配置

公園



公園は球技スポーツでボールを使う際、ボールが道路に出ないようにするため道路際ではなく奥に設けた。土の部分と芝の部分とを区別することで移動場所と遊ぶ場所をはっきりさせることで乳児が来て、遊んでいる子供との接触の危険を減らすことができるようにした。

駐車場



球体を空中に浮かせることでできた下の空間に駐車場を設けた。幅は、縦が5m、横が３ｍで設けた。歩道と車道を別にすることで、奥の公園に行く際の安全を確保した。駐車場は柱を避けつつも、車で走りやすいようになるべく直線を多くした。